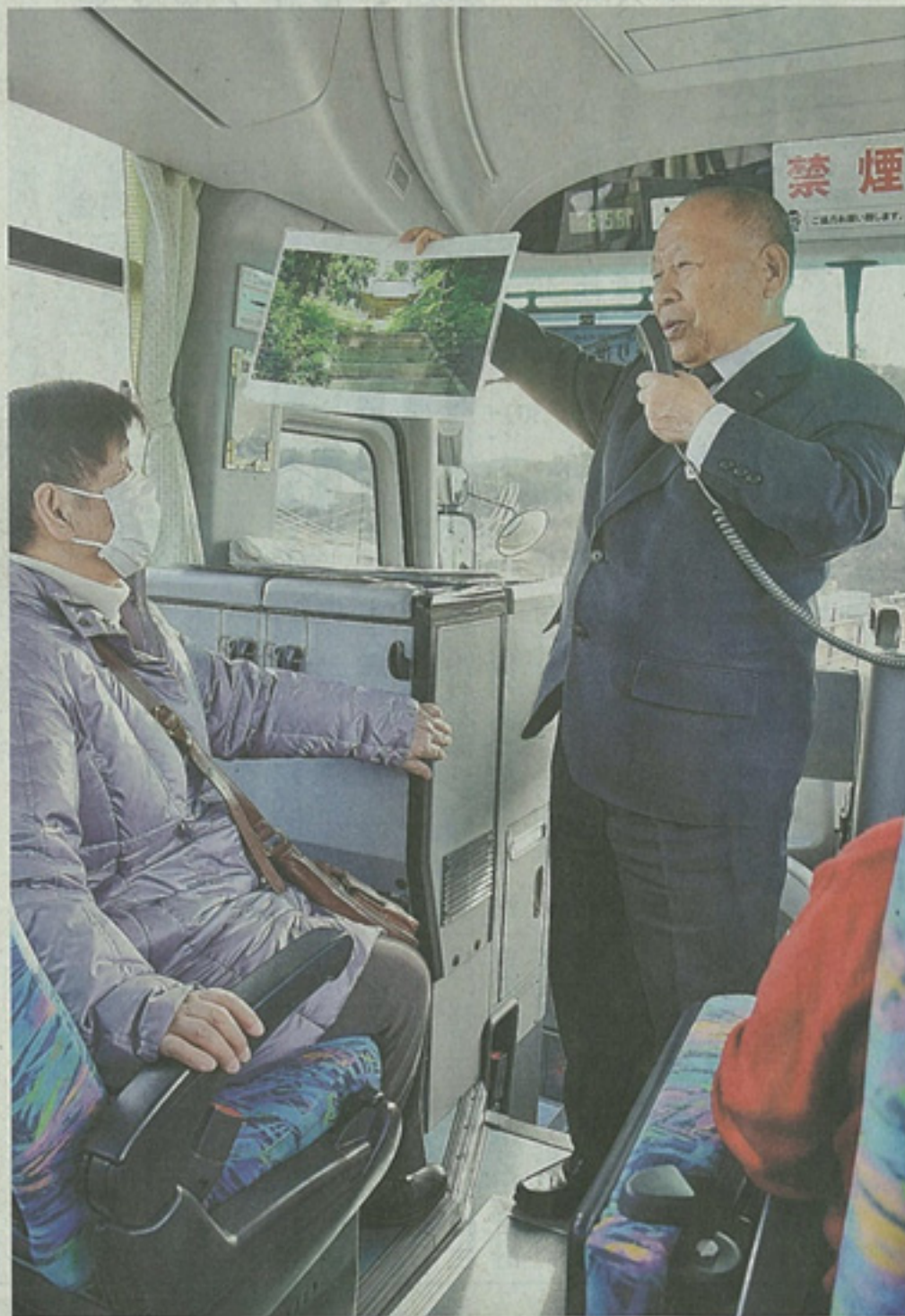


津波の記憶 語り継ぐ

防災「知る」ことから



語り部バスの中で乗客に語りかける伊藤さん

「行政が決めた避難場所でも、絶対安全という保証はない」。

宮城県南三陸町の南三陸ホテル観洋が連日運行する「語り部バス」でマイクを持った伊藤文夫渉外部長が呼び掛けた。77歳の今も現役で、多いときは週に3、4回、ガイドする。「家族で方が一の時のことを話し合っただけ。自分が住んでいるのはどんな土地で、近所にどんな人が住んでいるのか、知っておいて」

伊藤さんは60年前に起きたチリ地震津波の時、苦しい体験がある。サイレンの後、「地震で津波が来る」と聞いても、揺れを感じなかったので自転車で海を見に行った。津波に遭い、高台に逃げて九死に一生を得た。

東日本大震災の当日は内陸に出掛けていて、津波自体は見えない。だが、妻とは1週間近く連絡が取れず、無事確かめるため必死で電話をかけた。

南三陸の伊藤さん

やがて同僚や近所の人に津波の体験を聞くようになり、「震災の現実を知ってもらうことが防災意識向上につながる」とガイド役を買って出た。

バスの車内で伊藤さんは静かに語る。地元の戸倉小の児童は高台の神社に逃れ、6年生は卒業式で歌うはずだった「旅立ちの日」で励まし合った。卒業式は8月まで遅れ「日本一遅い卒業式」となったが、「旅立ちの日」を作った歌手の川嶋あいさんが訪れ一緒に歌ってくれた。戸倉中は翌日に卒業式を控えていた。高台にあり、町の指定避難場所だったが、津波が2方向から挟み撃ちするようになり、十数人が犠牲になった。

町内にある結婚式などの催事場「高野会館」は高齢者の芸能発表会でにぎやかだった。地震の後、鉄筋コンクリート4階建ての建物から出れば、津波に巻

き込まれる。伊藤さんの後輩にあたる職員は冷静な判断で呼び掛けた。「生きたかったら、ここに残れ」。最大15以上の津波が何度も押し寄せたが、とどまった人や近隣の住民ら327人は助かった。自宅などに戻ろうと外に出た数人は帰らぬ人となった。

ホテル観洋の語り部バスは、震災翌年の2月から始まった。毎朝約1時間、町内を巡り、宿泊客でなくても参加できる（料金は大人500円）。参加者が少なくても運行を休んだ日は1日もない。これまで延べ39万人が利用した。

民間連携組織の「3・11メモリアルネットワーク」によると、岩手、宮城、福島の3県で少なくとも65の組織が語り部やガイド、学習ツアーなどの活動を続けている。